思えるのは、本人の力だ。

体験があるから、本の活字がイメージを持って広がっていく。体験と本のキャッチボールで本の魅力も増し、さらなる面白い世界が開けてくる。

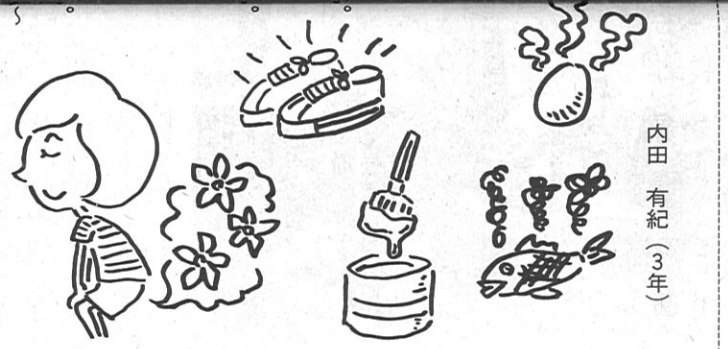
本は、たくさん与えればいいというものではない。大切なのは、面白いと思える1冊に出合えるかどうかだ。

図書館からいつも同じ本を借りてくる子がいる。親は「前にも一度借りたからいいんじゃないの」と言いがちだが、子どもの興味がそれだけ持続しているのは素晴らしいことなのだ。

親は、子どもに知識を伝えなくては、と気負わなくていい。

夕日を見た子どもが「きれいだねえ、どうしてあんな色なんだろう」と言ったら、「すごいねえ、よく気が付いたねえ」と受け止め、共感してあげればいい。

すぐに答えを出さなくても疑問に寄り添うだけでいい。自分の発見を受け止めてもらっただけで子どもは自信を持つし、積極的に動きだす。あとは子どもの力を信じて待てばいいのだ。



内田　有紀（3年）

（イラスト　赤嶺元気）

写真を見ながら記事の見出しを考える児童
＝宜野座村・漢那小学校

想を膨ら

4年1組は、テーマに沿って各自が新聞から写真を切り抜きし、すごろくを作った。過程を通して新聞への興味・関心を深め、話し合いでコミュニケーション能力を高めるのが目的。児童は工夫した点や、写真を選んだ理由について発表した。

公開授業後、県NIEアドバイザーで与那原中学校の兼松力教諭が「コミュニケーション活動とNIE」と題した講話も行われた。

兼松教諭は新聞の基本的な読み方や、教材としての新聞の優位性を紹介。「総覧性と紙媒体として自由に切り抜きができることが新聞の利点」と述べ、指導内容や地域性に合わせて応用できる教材としての可能性を説明した。

たんぽぽのタネ

難しい除去食の解禁

神村　さゆり

子どもが食物アレルギーではないだろうかと疑ったのは、生後間もなくのこと。完全母乳だったので、自分の食事と子の体調が面白いほど見事にリンクしていることに気付いた。

まず卵。食べるのを止めると肌が綺麗になる。けれどまたしばらくすると湿疹が出る。次に牛乳を止める。これが除去食の始まりである。いつの間にか冷蔵庫から乳製品や加工品などが消え、素材から料理することを覚えた。不思議なことに食べられないものがあるとレパートリーが増えた。

除去食を始めるのは簡単。トータルの栄養バランスはあるが、怪しいものを一つ一つやめていけばいい。だけどそれが終わりではなく、最終的に食べられるようにすることが目標。除去食はその制限を解除することが難しい。

子どもが4歳のころ、牛乳を試してみた。小さなカップにアイスクリームを少量。生まれて初めて食べた甘い食べ物に驚いていたが、体調は特に変調は見られず、これに気を良くした私はピザを食べに行くことにした。店では、生まれて初めて食べるピザが相当気に入ったようで、バクバク食べる。あまりにも美味しそうに食べるので食べたいだけ食べさせる。

いい気になっていると案の定アトピーが出る。「ごめんね、ピザ、まだ早かったみたいね」。私が謝ると彼は焦った顔で「違う！これはピザじゃない、アイスクリーム食べたから」。ピザが原因だと認めると食べられなくなる。2週間も前に食べたアイスクリームのせいにして必死にピザをかばうなんて、よほど気に入ったのでしょうね。（沖縄アレルギーを考えるシーサーの会代表）

＝毎週土曜日掲載

沖縄県内のオートロックマンションにお住まいのみなさまへ

お住まいのマンションで
新聞の階上配達を検討してみませんか？

オートロックマンションでも、「新聞を玄関先まで配達してほしい」という多くの入居者の方からの声が寄せられています。そこで沖縄県支部新聞公正取引協議会階上配達推進